



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 英語群子音の内的機序（Ⅱ）：言理学的探求                                                                |
| Author(s)    | 林, 栄一                                                                               |
| Citation     | 大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 1-14                                                          |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/98927">https://hdl.handle.net/11094/98927</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 英語群子音の内的機序（Ⅱ）

## ——言 理 学 的 探 究——

林

栄

一

0. はしがき 本篇は季刊「構造言語学」（第2巻）所載の拙稿「言語の内的機序」に始まり、「アンゲリカ」（Vol. 4, No.2）の「英語における音節の内的機序」となって続き、さらに「中山先生記念論文集」に寄稿した「英語における Post-Vocalic/r/の内的機序」に発展し、「英語学」（第1巻）に見出される「英語群子音の内的機序」がスペースの関係で頭韻群子音 (Initial Consonant Cluster) のみの考察にとどまった後を受けて、尾韻群子音 (Final Consonant Cluster) および語中母音間群子音 (Medial Consonant Cluster) を扱うものであります。この一連の試みはおよそ開拓探究されつくしたと思われる英語の音節構造を、言理学 (Glossematics) 的な考え方を適用して、従来あまり企てられなかった角度から内面的な光を投げかけることを目的としていますが、思わぬ過誤のある場合や、その後の研究により再検討ないし訂正を要する場合のあることは実際に生じていますので、あくまでも試論以上のものではありません。なおこのシリーズの各篇は、発表の時期と機関が異なっていて、それぞれが一応の独立した恰好になっていますので、本篇も、これだけを読まれる場合を考えて、今までに到達した結果とその筋道を、関係のある分だけ予め述べておきたいと思います。

0.1. 内的機序 まず「内的機序」ということですが、これは「内在的な機能の秩序」ということなのです。内在的とは immanent の訳語で transcendent (外在的) に対します。一言で申せば、言語は言語自体に内在する構造によって探究されねばならないという立場でありまして、裏からいえば、言語に外在する要因である実在界に属する音波とか思惟作用とかいう実質 (Substance) は、音声や意味に直接関係をもたないのです。ということは、言語とはそれらから抽象された形式 (Form) にほかならないということになります。詳しく述べると際限がありませんが、要するに内在的な立場とは純粋な形式として言語を考察することを論理的必然として要請するものであります。次に機能 (Function) とは何であるかといいますと、言理学の解釈では形式AおよびBによって示さ

れる2項間の依存関係 (Dependence) ということですが、これを3種に分けて (1) 相互依存 (Interdependence): 一方の存在が他方の存在に互に不可欠である関係 ( $A \leftrightarrow B$ ) (2) 一方依存 (Determination): 一方の存在が他方の存在に不可欠であるが、その逆は成立しない関係 ( $A \leftarrow B$ ,  $A \rightarrow B$ ) (3) 相互無依存 (Constellation): 互に相手の存在が不可欠でなく併存する関係 ( $A \parallel B$ ) とします。(矢印を受ける方を恒常体 (Constant), 矢印がない方を可変体 (Variable) と呼びますが、両者とも機能の担い手として機能体 (Functional) といいます。なお、恒常体が1つ以上ある場合 (すなわち (1) と (2) の場合) には結束作用 (Cohesion), 恒常体または可変体同志である場合 (すなわち (1) と (3) の場合) を相互作用 (Reciprocity) と称しますが、これも有用な区別であります。) これらの機能によって形式はその存在が確認されます。機能のないところには有意味な形式は存在しない道理だからであります。それから秩序 (Order) ということですが、上述の機能は2つの異なった世界で観察されねばなりません。1つはAとBとが現実に関連している様相 (連関 (Relation)) のものであり、他はAとBとがそれぞれ別個の系列 (Paradigm) に属しているという分立の様相 (相関 (Correlation)) のもので、前者は統合 (Syntagmatic), 後者は系合 (Paradigmatic) といいます。この両者は統合→系合という関係になりますが、具体的にいえば実際の言語は統合の姿であり、それを可能ならしめている体系が系合ということになります。そこで上の3つの機能は、統合では (1) 連帯 (Solidarity) (2) 選択 (Selection) (3) 結合 (Combination), 系合では (1) 相補 (Complementarity) (2) 限定 (Specification) (3) 自律 (Autonomy) とそれぞれ区別して呼ばれます。

0.2. 英語の音節の内的機序 さて、以上のことを基本に踏まえて、英語の音節構造を考察するわけですが、これを公式的に示しますと、Syllable = Accent Syntagm = Accent → Accent Theme ということになります。(音節とは統合の姿ですから、この場合の機能は選択であります。) 次に音節を調べるためには、操作の対象を設定しなければなりません。このシリーズではそれを転位 (Permutation) によって得られる自立形式の最小の単位である単一語 (Simple Word) に限定しております。なぜかならば、これが音節が現実の存在とカミあうことになるギリギリの線であるからです。そうすると、アクセントは英語の場合は换位テスト (Commutation Test) により強勢 (Stress) であることがわかり、それは系合的には  $(/ \rightarrow \wedge) \leftrightarrow /$  であり、統合的には  $/ \leftarrow ( \wedge /$

/ /) であると結論できます。それから上のアクセントを選択するアクセント幹は構成素 (Constituent) である母音 (Vowel) と子音 (Consonant) から成立していますが、両者の区別はアクセント幹の自立形式が母音 (/V/)、非自立形式が子音 (/C/) であるということです。アクセント幹は系合的には /CVC/  $\leftrightarrow$  (/CV/  $\leftrightarrow$  /VC/  $\leftrightarrow$  /V/)、統合的には /CVC/  $\leftrightarrow$  (/CV/  $\leftrightarrow$  /VC/  $\leftrightarrow$  /V/) であります。構成素は系合では /V/  $\leftrightarrow$  /C/ というわけですが、/V/ 同志と /C/ 同志は /Va/  $\leftrightarrow$  /Vb/, /Ca/  $\leftrightarrow$  /Cb/ となります。/V/ は /i, e, a, o, u,  $\Delta$ / の6つが定立され、/C/ は頭韻 (Initial) として / $\text{?}$ -, h-/、尾韻 (Final) として /-p, - $\text{ə}$ /、頭尾韻に共通するものとして /-(p, b, t, d, k, g, f, v,  $\theta$ , i, s, z,  $\text{ʃ}$ , ʒ, m, n, l, r, j, w)-/ の20があります。(この場合頭韻と尾韻とは系合的には  $\leftrightarrow$  の相補であり、結合的には一の結合でありますし、/h-/  $\leftrightarrow$  (I,  $\bar{\text{F}}$ ), ( $\bar{\text{I}}$ , F)  $\leftrightarrow$  -p/ という機能がそのうらにあることは心得ていなければなりません。次に、アクセントとアクセント幹の関係は統合面で (/ /  $\leftrightarrow$  / ^ /)  $\leftrightarrow$  /CVC/, //  $\leftrightarrow$  (/CVC/  $\leftrightarrow$  /CV/  $\leftrightarrow$  /VC/ /V/) となり、アクセントと構成素の関係は母音では (/ /  $\leftrightarrow$  / ^ /)  $\leftrightarrow$  /i, e, a, o, u,  $\Delta$ /, //  $\leftrightarrow$  /i, u,  $\Delta$ /  $\left[ \left( / / \leftrightarrow / ^ / \right) \leftrightarrow // \right] \leftrightarrow$  /i, u,  $\Delta$ /, (/ /  $\leftrightarrow$  / ^ /)  $\leftrightarrow$  /e, a, o/ (従って /i, u,  $\Delta$ / の3母音は3つのアクセントと結合) の機能をもつこととなります。子音にあっては、(/ /  $\leftrightarrow$  / ^ /)  $\leftrightarrow$  / $\text{?}$ -, w-, j-,  $\text{ə}$ / が特に注意をひきます。すなわち、// に対しては上の子音は機能が存在しないのです。上のことを総合しますと、 $\left[ \left( / / \leftrightarrow / ^ / \right) \leftrightarrow // \right] \leftrightarrow$  /I(除/ $\text{?}$ -/) + i, u,  $\Delta$  + F(除/-w-, -j-,  $\text{ə}$ -/) ということになりますが、この条件が満足される場合は実際には非常に稀であります。

0.3. 母音と核音 you/júw/, cute/kjúwt/, crooked (stick) /krúkt/ を比べてみますと、いずれも /CVC/ ではありますが、詳しくみれば、/C|V|C/, /C|CVC|C/, /CC|V|CC/ ということになります。ということは cute/kjúwt/ の /j-/ と /-w/ は、その外側に他の /C/ がある場合、その /C/ と結んで群子音にならず、/V/ の方に結んで音節の中心になることを示すもので、それは K  $\rightarrow$  (j  $\rightarrow$  ú  $\leftrightarrow$  w)  $\leftrightarrow$  t/ の構造をもつということです。このように音節の中核となる被選択体を核音 (Nucleus) と呼ぶとすれば you/júw/ の場合核音は /ú/, cute/kjúwt/ の場合は /júw/ が全体として核音になります。前者は単純核音 (Simple Nucleus) 後者は複合核音 (Complex Nucleus) で、母音とは単純核音のことです。複核は  $\left[ \left( /j/ \leftrightarrow /V/ \right) \leftrightarrow /j, w, \text{ə}/ \right]$  で (/ /  $\leftrightarrow$  / ^ /) を選択していることは前述の通りです。ここで紹介なのは Post Vocalic /r/ です。これは方言

差もからまるので問題は一層複雑になりますが、筆者は基本的には (/ / < / ^ / )  
 → [ ( / V / < / ə / ) < / r / ]<sup>(1)</sup>, [ ( / V / < / ə / ) - / r / ]<sup>(2)</sup>, ( / V / < / r / )<sup>(3)</sup> および // < / Δ / < / r / ) ということになると考えています。(1) はアメリカ中西部方言にかなり優勢な型であり、(2) は (3) と結んでイギリス南部方言を中心とする一般的な型であります。(1) と (2) は入子構造になっている二重旗核といえましょう。

0.4. 単子音と群子音 英語では/CVC/の/C/ は1つである場合(単子音)と、2つ以上があつまって1単位をなしている場合(群子音)がありますが、それぞれ頭韻と尾韻にわかれることはいうまでもありません。ところで、群子音は単子音の集合であるとはいえ、その可能な組み合わせは必ずしも数学的な計算では解けない、特定の言語に特定である型があります。いわゆる 英語 ランサ (Englishness) はここにも見出すことができるのであります。これには生理的、物理的な音の実質から解明せられる要因があることは申すまでもありませんが、本稿の出発点は最初に述べたようにそれらを離れた形式的操作にあるのですから、ここでは一切触れません。問題は群子音の内的機序の発見にあります。一般的に形式AとBがあつて同時にABがあれば、このABは結合ということになりますから、群子音の場合はすべて/単子音-単子音/であることとなりますが、個々の組み合わせのレベルで考察しますと、必ずしも自由に集まっているのではなく一定の型に制限されているのですから、それらの結合機能を解明することは決して無用のものでないはずです。

0.5. 頭韻群子音 そこで、まず頭韻群子音を調べてみますと、核音に近い方から並べて  $I^1 = /l, r, w, ʒ/$ ,  $I^2 = /v, f, p, b, g, k, m, n, θ, t, d, h/$ ,  $I^3 = /s, ʃ/$  のようになります。これは極めて稀なものや外来音は一応除外しての話ですが、

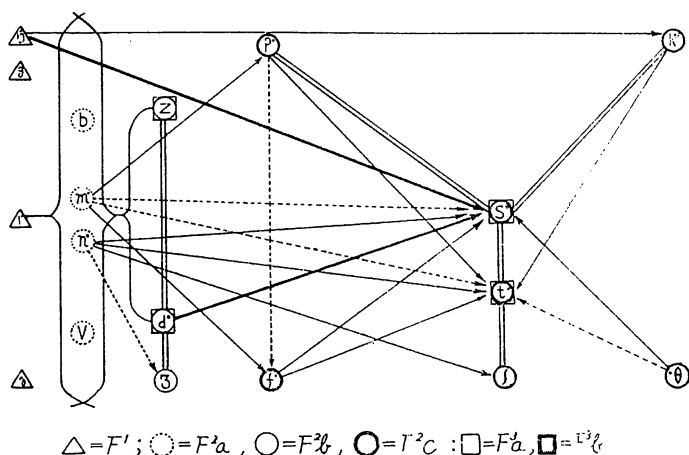
(a) 二重頭韻群子音:  $I^2 + I^1$  (20例),  $I^3 + I^2$  (3例),  $I^3 + I^2$  (7例),  $I^2 + I^3$  (1例) (計31例) (b) 三重頭韻群子音:  $I^3 + I^2 + I^1$  (5例) (総計36例) というような組合せを作っていきますと、数は多大ではないとしてもその内面的関係はかなり複雑であります。たとえば、/fr-/ は /f/ - /r/ という結合(相互無依存)ですが、/hw-/ は選択(一方依存)になります。この場合考えるべき重要なことは方向性 (Orientation) でありまして、たとえば /h/ + /w/ は /h/ → /w/ が成立しますが /h/ < /w/ は成立しません。/ʃ/ → /r/ も同様です。逆に /t/ < /ʃ/, /d/ < /ʒ/ であることにも注意せねばなりません。また、三重群子音の  $I^3 + I^2 + I^1$  は  $(I^3 + I^2) + (I^2 + I^1)$  ですが /str-/、/spl-/ 等の解釈は非常にむづかしい問題があります。結局はこれらは /s/ < /tr/, /sp/ < /l/ のようにみる方が

よいように筆者は考えています。なお、/tʃ-/、/dʒ-/が果して単子音か群子音かそれともそのどちらでもないかという問題もありますが、この解決は頭韻群子音だけで求めるのは無理であります。しかし、/tr-, dr-/などと /tʃ-, dʒ-/ とでは内的機能が異なることは明らかですので、後者は複合頭韻群子音 (Compound Initial Consonant cluster) と特に呼んでおきます。

以上、本篇に至るまでに辿った考え方を表記に関係する部分をも含めて極めて簡単に述べてきました。一切詳しい論述や具体例を省いたスケルトンですので、わかり難いと思いますが、百数十枚の内容を数枚の紙面に圧縮するためには是非もないことで、詳しくはそれぞれの事項を扱った前述の論文を参照して頂くより仕方がありません。しかし大体のところは述べましたので、以下の記述や表記の諒解は得られたことと考え、いよいよ尾韻群子音にとりかかりたいと思います。頭韻群子音に比べると尾韻の方はまだそれほどに開拓されていないようですが、それでも文献はかなりあります。それらを列記する余裕がありませんので、これも省きますが、本篇に先行する拙稿には主だったものは示してあります。

1. 尾韻群子音の分類 頭韻群子音にあっては Bloomfield のいわゆる Pre-, Main, Post- の Initial は殆ど固定してしまっていて、それを I<sup>3</sup>, I<sup>2</sup>, I<sup>1</sup> というように系数によって示したわけですが、この番号づけは実は尾韻群子音にも共通して使用できる便益があります。ただし方向は逆になります。すなわち、尾韻は核音に近い方から F<sup>1</sup>, F<sup>2</sup>, F<sup>3</sup> ということになるからです。しかし、頭韻と異なり尾韻においては F<sup>2</sup> の成員はかなり自由な結びつきをしますし、F<sup>2</sup> と F<sup>3</sup> とは同一の子韻が交流したりして、極めて複雑な様相を呈します。下に頭韻群子音の場合と同じように、尾韻群子音の分布図を工夫して分類を行ってみましょう。単純尾韻のうち /-j, -w, -a, -r/ は核音に入りますので、群子音になるものは次の 18 に限定されています。

下の表の一番左に三角形で囲んであるのは、核音に直結するのみで、後に他の子音を従えることはあっても、その前に他の子音をもつことのない F<sup>1</sup> です。このうちの /-l/ は線で囲まれた F<sup>2</sup> の a, b, c のいずれをも従えることができます。なお /-l/ 以外の F<sup>1</sup> は四角形で囲んだ F<sup>3</sup> a の /z/, /d/ とだけ結ぶことが示されています。F<sup>2</sup> は a, b, c に分けてありますが、これも a は b に先行、b は c に先行するがその逆は成立しないことを意味するものです。尤もその全部がこの順序に結ぶのではなく矢印で示されたものだけに限ります。



F<sup>2b</sup> と F<sup>2c</sup> はそれぞれ同志で組み合わせがありますが、F<sup>2a</sup> はそれがありません。点線によるのは稀なものであり、二重線で結んであるのは互に前になり後になることが可能であることを示しています。(F<sup>2a</sup> は互いに前後することはありません。)なお、太い線で結んであるのは二重群子音には現われず三重以上の組み合わせにみられるものです。それから、右肩に小さな黒いマルをつけてあるのは、左肩に小さな黒いマルをつけた F<sup>2c</sup> の /-θ/ と結ぶことを表示したものです。/-k/ と /-s/ のみはそれが二重マルですが、これは三重以上の組合せに現われるということです。(それでは / θ/ と /-s, -t/ とは二重線でつなぐべきであると思われるかもしれませんが、この場合の /-sθ, -tθ/ は肩につけた小黒点で既に表示されていますので二重に記す必要はありません。)最後の F<sup>3</sup> はその a が /-z, -d/, その b が /-s, -t/ ですが、これは F<sup>2b</sup> と F<sup>2c</sup> とそれぞれ同一の子音ですので区別がつきません。従って F<sup>3</sup> というのを特に設定しなくてもよいと考えられますが、分布をみますと、最大限に可能な群子音の最後になるのはこの4つのどれかであることがわかります。もちろんこれらは形態論的には格、数、人称、時制等の屈折語尾であるからですが、ここではそれを問題にしているのではなく、その外側には他の子音が来ないという表現の形式の事実が F<sup>3</sup> を認める根拠であります。以上のことを諒解すれば、この表でおよそ存在する尾韻群子音の殆どすべてが示されていることがわかり

ましょう。次に具体的な組み合わせを例示してみます。あまり普通でないもの、稀な例、外来語音等には\*をつけておきます。なお、一度出た組み合わせは、要素が異なって同一のものがあったとしても繰返しません。たとえば build と billed とは F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>b と F<sup>1</sup>+F<sup>3</sup>a ですが、 /-ld/ としては同じですから、build が一旦出てくれば billed は追加しないことにします (なるべく F<sup>3</sup> がつかないものを優先的に示す方針です。しかし一方が\* で他方が普通な組み合わせであれば両方示し、1 つに計算します。逆に同一語でも 2 つ以上の組み合わせがあれば、別々に記します。たとえば、length は /-ŋθ/ と /-ŋkθ/ の両方が数えられます。

2. 二重尾韻群子音 ① F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>a: 1. /-lb/ (bulb) 2. /-lm/ (film) 3. /-ln/ (kiln) 4. /-lv/ (solve) ② F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>b: 1. \*/-lz/ (Charles) 〔④の7では普通〕 2. /-ld/ (build) 3. \*/-lɜ/ (bilge) ③ F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>c: 1. /-ŋk/ (thank) 2. /-ŋθ/ (length) 3. /-lp/ (help) 4. /-lk/ (milk) 5. /-ls/ (pulse) 6. /-lt/ (belt) 7. /-lf/ (wolf) 8. /-lʃ/ (welsh) 9. /-lθ/ (health) ④ F<sup>1</sup>+F<sup>3</sup>a: 1. /-ŋz/ (hangs) 2. /-ŋd/ (hanged) | 3. /-gz/ (begs) 4. /-gd/ (begged) | 5. /-čz/ (clothes) 6. /-čd/ (clothed) 7. /-lz/ (bells) 〔②の1では\*〕 ⑤ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>b: 1. \*/-mz/ (Thames) 〔⑦の4では普通〕 | 2. /-nz/ (lens) 3. /-nd/ (lend) 4. \*/-nɜ/ (range) ⑥ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>c: 1. /-mp/ (lamp) 2. /-mf/ (nymph) 3. \*/-ms/ (glimpse) 4. \*/-mt/ (tempt) 5. /-mθ/ (warmth) | 6. /-ns/ (dance) 7. /-nt/ (tent) 8. /-nʃ/ (avalanche) 9. /-nθ/ (month) ⑦ F<sup>2</sup>a+F<sup>3</sup>a: 1. /-bz/ (cabs) 2. /-bd/ (cabbed) | 3. /-md/ (tamed) 4. /-mz/ (stems) 〔⑤の1では\*〕 | 5. /-vz/ (lives) 6. /-vd/ (lived) ⑧ F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>b: 1. /-dz/ (adze) 2. /-dɜ/ (judge) ⑨ F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>c: 1. /-dθ/ (width) ⑩ F<sup>2</sup>b+F<sup>3</sup>a: 1. /-zd/ (buzzed) | 2. \*/ɜd/ (rouged) ⑪ F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c: 1. \*/-pf/ (Zipf) 2. /-ps/ (lapse) 3. /-pt/ (crypt) 4. /-pθ/ (depth) | 5. /-ft/ (soft) 6. /-fθ/ (fifth) | 7. /-ks/ (lax) 8. /-kt/ (act) 9. \*/-kθ/ (sixth) | 10. /-sp/ (lisp) 11. /-sk/ (risk) 12. /-st/ (last) | 13. /-tʃ/ (catch) 14. /-tθ/ (eighth) 15. \*/-ts/ (blitz) 〔⑫の5では普通〕 ⑫ F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b: 1. /-fs/ (cuffs) 2. /-ft/ (lashed) | 3. /-θs/ (fourths) 〔/-rθs/ とみなないことについては 0.3 参照〕 4. \*/-θt/ (toothed) | 5. /-ts/ (cats) 〔⑪の15では\*〕 ー計65 (\*7)
3. 三重尾韻群子音 ① F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c: 1. /-ŋst/ (amongst) 2. /-ŋkθ/ (length) 3. /-ŋks/ (minx) | 4. /-lkt/ (mulct) 5. /-lst/ (whilst) 6. /-lts/



(waltz) 7. /-ltʃ/(filch) 8. \*/-ltθ/(health) 9. /-lfθ/(twelfth) 10. /-lks/(calx) ③ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>b: 1. /-ndʒ/(change) ④ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>c: 1. /-ndθ/(thousandth) ⑤ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c:1. /-ntʃ/(lunch) 2. \*/-ntθ/(month) | 4. /-mps/(glimpse) 5. /-mpt/(tempt) 6. \*/-mpf/(nymph) 7. \*/-mpθl(warmth) ⑥ F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c: 1. /-dst/(midst) ⑦ F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c:1. /-kst/(text) 2. /-ksθ/(sixth) | 3. /-t・st/(midst) [ /・/は内部開放連接(Internal Open Juncture)をあらわします。このことについては後で触れます。] ⑧ F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>a+F<sup>3</sup>a: 1. /-lbz/(bulbs) 2. /-lbd/(bulbed) 3. /-lmz/(films) 4. /-lmd/(filmed) 5. /-lnz/(kilns) 6. /-lnd/(kilned) 7. /-lvz/(solves) 8. /-lvd/(solved) ⑨ F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>b+F<sup>3</sup>a: 1. /-ldz/(builds) 2. \*/-lʒd/(bilged) ⑩ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>b+F<sup>3</sup>a: 1. /-ndz/(lends) 2. /-nzd/(cleansed) 3. \*/-nʒd/(ranged) ⑪ F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>b+F<sup>3</sup>a: 1. /-dʒd/(adzed) 2. /-dʒd/(judged) ⑫ F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b: 1. /-ŋkt/(thanked) 2. /-ŋθs/(lengths) | 3. \*/-lʒs(healths) 4. \*/-lθt/(healthd) 5. /-lps/(helps) 6. /-lpt/(helped) 7. /-lft/(golfed) 8. \*/-lft/(welshed) ⑬ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b:1. /-mfs/(nymphs) 2. /-mft/(triumphed) 3. \*/-mst/(glimpsed) 4. \*/-mts/(tempts) | 5. /-nst/(danced) 6. /-nts/(tents) [⑤の3では\*] 7. /-nʒs/(months) 8. /-nθt/(plinthed) 9. /-nʃt/(avalanched) ⑭ F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b:1. /-dʒs/(widths) ⑮ F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b:1. /-pts/(crypts) 2. /-pst/(lapsed) 3. \*/-pʒs/(depths) 4. \*/-pʃt/(depthd) | 5. /-kts/(acts) | 6. /-fts/(rafts) 7. /-fθs/(fifths) | 8. /-sps/(lisps) 9. /-spt/(lispd) 10. /-sks/(risks) 11. /-skt/(riskd) 12. /-sts/(lists) | 13. /-tθs/(eighths) 14. \*/-tst/(blitzed) | 15. /-tʃt/(touched)=計 71(\*14)

4. 四重尾韻群子音 ① F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>b+F<sup>3</sup>a:1. /-ldʒd/(bilged) ② F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c: 1. \*/-ŋkst/(amongst) ③ F<sup>1</sup>+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b: 1. /-ŋkθs/(lengths) 2. /-ŋkst/(jinxed) | 3. /-lkts/(mulcts) 4. /-ltst/(waltzed) 5. /-ltʃt/(filched) 6. \*/-ltʒs/(healths) 7. \*/-ltʃt/(healthd) 8. /-lfʒs/(twelfths) 9. /-lkst/(calxed) ④ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>b+F<sup>3</sup>a: 1. /-ndʒd/(changed) ⑤ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>b+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b: 1. /-ndʒs/(thousandths) ⑥ F<sup>2</sup>a+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>3</sup>b: 1. /-ntʃt/(lunched) 2. \*/-ntʒs/(months) 3. \*/-ntʃt/(plinthed) | 4. \*/-ntst/(danced) | 5. /-mpst/(glimpsed) 6. /-mpts/(tempts) 7. \*/-mpfs/(nymphs) 8. \*/-mpft/(triumphed) 9. \*/-mpʒs/(warmth) 10. \*/-mpθt/(warmthd) ⑦ F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c+F<sup>2</sup>c: 1. \*/-kstθ/(sixth)

⑧  $F^2c + F^2c + F^2c + F^3b$  : 1. /-ksts/(texts) 2. /-ksθs/(sixths) = 計26(\*11)  
 総計162(\*33)

以上列挙したものには大分問題があります。\*印をつけたものは大体nonce-form 的なものですが、その選定には文句があるかもしれませんし、それ以外にも偶発的な変形はありうるわけです。しかし、現実に諸家が記録している程度の組み合わせは一応リストにのせてありますので、余程特殊なものでない限り英語にみられる尾韻群子音の殆どすべてが網羅されていると考えてよいでしょう。ところで、midst が /-tst/ である場合、blitzed の /-tst/ と同じではないようですし、また /-tʃ/, /-dʒ/, /-ts/, /-dz/ などが、果して1単位なのか2単位なのか、それともそのいずれでもないのか、というような困難な問題を解決しなければなりません。そしてこれはまた語中母音間群子音の処理にも関係しますので、コトは簡単ではなくなってきます。それらは一挙に解決することができませんので、順次に考察することになります。

5. 二重尾韻群子音の機能 2で示した実例は一応網羅的でしたが、\*印をつけたものはあまり普通なものでありませんので、それらを除いて尾韻の位置による分類によって組み合わせを整理してみますと、次のようになります。なお、2では同じ尾韻の組み合わせは種類が異なっても原則として繰返さなかったのですが、ここでは同じ尾韻の組み合わせでも種類が異なれば重複して示します。

A.  $F^1 + F^2 =$  ①  $F^1 + F^3a$  : /l/←/b, m, n, v/ ②  $F^1 + F^2b$  : /l/←/z, d/ ③  $F^1 + F^2c$  : /l/←/p, f, s, t, ʃ/, /ŋ, l/←/k, θ/ || B.  $F^2 + F^2 =$  ④  $F^2a + F^2b$  : /n/←/z, d/ ⑤  $F^2a + F^2c$  : /m/←/p, f/, /n/←/s, t, ʃ/, /m, n/←/θ/ | ⑥  $F^2b + F^2b$  : /d/←/z, ʒ/ ⑦  $F^2b + F^2c$  : /d/←/θ/ | ⑧  $F^2c + F^2c$  : /p, k/←/s, t/, /f/←/t/, /s/←/p, k, t/, /t/←/ʃ/, /p, f, t/←/θ/ || C.  $F^1 + F^3 =$  ⑨  $F^1 + F^3a$  : /ŋ, g, l, ð/←/z, d/ || D.  $F^2 + F^3 =$  ⑩  $F^2a + F^3a$  : /b, m, n, v/←/z, d/ ⑪  $F^2b + F^3a$  : /z/→/d/, /d/←/z/ | ⑫  $F^2c + F^3b$  : /f/←/s, t/, /t, θ/←/s/, /ʃ, s/←/t/ (A). 次に尾韻の種類の区別を一切外して、英語の尾韻の組み合わせを総括的に整理してみます。\*印を考慮外におくことは上と同じですが、尾韻連結の英語ラシサの原型をみようというわけです。従って同一の尾韻の組み合わせは重複しないようにします。① /l/←/b, m, n, v, p, f, s, t/ ② /ŋ, l/←/k/ ③ /ŋ, l, g, ð, b, m, n, v/←/z, d/ ④ /z, ʒ/→/d/ ⑤ /d/←/z/ ⑥ /d/←/z/ ⑦ /ŋ, l, m, n, d, p, f, t/←/θ/ ⑧ /θ/→/s/ ⑨ /m/←/p, f/ ⑩ /n/←/s, t, ʃ/ ⑪ /s/←/p, t, k/ ⑫ /p, f, k/←/s, t/ ⑬ /t/←/s, ʃ/ ⑭ /ʃ/→/t/ (B). これがギリギリに簡単にまとめあげた二重尾韻群子音の連結方式

ですが、位置による区別を撤廃するとその大部分は相互無依存の結合であります。選択の機能をもつものは /z/→/d/, d/←/ʒ/, /θ/→/s/, /ʃ/→/t/ の4組にすぎません。これらはいずれも特殊な連結ですので0.5において述べたような複合頭韻群子音にならって、複合尾韻群子音 (Compound Final Consonant Cluster) と考えることはできないでしょうか。ただ頭韻の場合 /dʒ/ と並んで複合とされた /tʃ/ は尾韻にあっては結合の機能をもち選択でないことに注意がひかれます。実質面では有声・無声の対称によって1つにまとめられる /dʒ/ と /tʃ/ はアメリカの構造言語学では /j/ と /c/ とされ1対にされていますが、頭韻においてはそのことは一応うなずけるとしても尾韻においては、機能上別であることがわかります。しかも頭韻においてすら複合とし、/j/ と /c/ としなかったのは、/tʃ-/ の場合 /tʃíp/ (chip), /tʃíp/ (ship), /tʃíp/ (tip) のように分解されますので単純子音ということは無理であり、/dʒ/ の場合は /dʒín/ (gin), /dʒín/ (din) で /dʒín/ がないので /tʃ/ とは異なるのですが、弱音節では /síj-dʒar/ (sieger), /síj-dʒar/ (seizure), /síj-dʒar/ (seeder) というようなこともあるからでした。尾韻の場合はどうかと考えてみますと、/kátʃ/ (catch), /kátʃ/ (cash), /kátʃ/ (cat) || /rúwdʒ/ (rouge=scrummage), /rúwdʒ/ (rouge=red cosmetics), /rúwdʒ/ (rood) というような例があります。そうしますと、尾韻においてはなおさら単子音とすることはむづかしいと思います。/-dʒ/ はそれでも選択でありますのでせめて複合群子音とすべきでありましょう。それでは /-zd/, /-θs/, /-ft/ も選択ですから同じく複合群子音とすべきかという、/dʒ/ は  $F^2b + F^2b$  という同種尾韻子音の連結ですが、他の3者はそれぞれ  $F^2b + F^2a$ ,  $F^2c + F^2b$ ,  $F^2c + F^2b$  でありまして、いずれも  $F^2 + F^3$  という異種の尾韻子音がついたものですので、事情は同じではありません。そこで(A)と(B)の両方の分類を勘案して /dʒ/ のみを複合とします。これは頭韻において /str-/ や /skw-/ は選択の機能をもつのですが、/dʒ-/ や /hw-/ と事情が異なるので複合としなかったのと同じであります。(これらの差別をつけたのは、語中で意味をもつことが明らかとなりましょう。) なお、これと関連して /bétsi/ (Betsy) や /s.ádz/ (sudsy) における /ts/ や /dz/ をどう取扱うかというのも興味ある問題ですが、/tʃ/, /dʒ/ も以上ですっかり解決がついたわけではありません。これらは語中母音間群子音を扱う場合再び問題となります。

6. 三重尾韻群子音の機能 三重尾韻群子音の機能を調べるためには、まず

a b c の3つが連続する前提として ab と bc という二重連結が存在していることを心得ておかねばなりません。一般的な公式は  $abc = (a+b) + (b+c) = (a+b) + c$  or  $a + (b+c)$  であります。そこで、たとえば  $/-f\theta/$  (twelfth) をとってみますと、これは二重において  $/-lf/$  もあり  $/-f\theta/$  もあります。これが常態ですが、さらに調べてみますと、 $/lf/$  は  $/l/-f/$  であり、 $/f\theta/$  は  $/f/-\theta/$  ですから、この3つの尾韻の関係は同じであります。そうすると、これは  $/(l+f) + \theta/$  であるか、 $/l + (f+\theta)/$  であるか、ということになります。ところで、群子音は頭韻であれ尾韻であれ、ともに核音が中心でありますから、普通の場合は系数の若いものとの結びつきが優先しますので、前者すなわち  $/lf/-\theta/$  とすべきでありましょう。次に  $/-ld\zeta/$  (bilge) はどうかと考えますと、 $/ld/$  は  $/l/-d/$  ですが  $/d\zeta/$  の連結は  $/d/\leftarrow/\zeta/$  という複合群子音ですから、 $/l + (d+\zeta)/$  すなわち  $/l/-d\zeta/$  となります。  $/-ld\zeta/$  (builds) は  $/ld/-\zeta/$  です。  $/-nzd/$  (cleansed) は  $/zd/$  が  $/z/ \rightarrow d/$  でありますので、やや事情が異なるようです。しかし  $/zd/$  は複合群子音ではないので、 $/-ld\zeta/$  と同一ではありませんまい。ということは、 $/nz/\rightarrow/d/$  と解釈することになると思います。  $/-tft/$  (touched) も同じで、 $/t/-f/\rightarrow/f/\rightarrow/t/ = /tf/\rightarrow/t/$  です。それから  $/-dzd/$  (adzed) は三重連結において同じ子音が両側に現われているという例がありますが、これは  $/dz/\rightarrow/d/$  であって  $/-nzd/$  と同じ結果になります。  $/-sps/$  (lisps) や  $/-sts/$  (lisps) は  $/-lf\theta/$  と同じです。それなら  $/-d\zeta d/$  (judged) はどうかと申しますと、\*印を除外した場合  $/\zeta/\rightarrow/d/$  の組み合わせは二重連結にはありません。そこで、ここに大きな問題が浮び上がってくるわけです。すなわち、三重の  $abc$  は二重の  $ab + bc$  があって成立するという前提がくずれたことになるのです。そしてそれはこの1例だけでなく、 $/-n\zeta st/$  (amongst),  $/-n\zeta k\theta/$  (length),  $/-dst/$  (amidst),  $/-ks\theta/$  (sixth),  $/-n\theta t/$  (plinthed) などと同じで、 $/n\zeta s/$ ,  $/k\theta/$ ,  $/ds/$ ,  $/s\theta/$ ,  $/\theta t/$  という二重尾韻群子音は少なくとも\*がない普通の連結では存在しないのですから、 $/d\zeta d/$ ,  $/n\zeta k\theta/$ ,  $/ks\theta/$ ,  $/n\theta t/$  では  $bc$  が、 $/n\zeta st/$ ,  $/dst/$  では  $ab$  が二重連結において欠如しているのに、 $abc$  が成立していることになります。従って、「三重尾韻群子音では、 $ab$  または  $bc$  が二重連結において既存のものであれば、 $c$  または  $a$  はそれと結ぶことができる」という一段と包括的な法則をたてることが可能であります。これは上述の  $abc = ab + bc$  と矛盾するものではありません。新しい法則によれば、 $abc = ab + bc$  は3者を2分割した場合両者が互に既存のものである

ということにすぎないからです。ここで、三重尾韻群子音の機能をまとめますと、「3子音の連結を2分割して、(A)互に二重連結において既存である場合、(1)両者ともに結合であれば系数の若い連結が優先して残り」と結合し、(2)一方が選択他方が結合であれば、(a)選択が複合をなすときはそれが優先して残り」と結合し、(b)選択が複合をなさないときは系数の若い連結が優先して、(i)最初が結合ならば残り」と選択し、(ii)最初が選択ならば残り」と結合になり、(3)両方が選択であるときは、(a)一方が複合であればその連結が優先して残りのものと選択になり、(b)(i)両方とも複合であるか(ii)両方とも複合でないならば、(i)(ii)とも系数の若い連結が優先して残り」と選択になる。(B)一方のみが既存の二重連結ならば、既存の方が残りに選択される」ということになります。選択の方向を加えてその可能性の全部を公式にして示しましょう。太い線の中は複合を意味します。(A)(1) / (a-b)-c/ (2) (a) (i) (α) / (a←b)-c / (β) / (a→b)-c / (ii) (α) / a-(b←c) / (β) / a-(b→c) / (b) (i) (α) / (a-b)←c / (β) / (a-b)→c / (ii) (α) / (a←b)-c / (β) / (a→b)-c / (3) (a) (i) (α) / (a←b)←c / (β) / (a←b)→c / (γ) / (a→b)←c / (δ) / (a→b)←c / (b) (i) (α) / (a→b)←c / (β) / (a→b)←c / (γ) / (a←b)→c / (δ) / (a←b)←c / (ii) (α) / (a←b)←c / (β) / (a→b)←c / (γ) / (a←b)→c / (δ) / (a→b)→c / (B) (i) (a) / [a-b]←c / (b) / [a←b]←c / (c) / [a→b]←c / (d) / [a←b]←c / (e) / [a→b]←c / (2) (a) / a→[b-c] / (b) / a→[b←c] / (c) / a→[b→c] / (d) / a→[b←c] / (e) / a→[b→c] / . (なお(B)の[ ]は既存連結を示します。)

以上を実例を以て示しますと、存在するのはその一部にすぎないことはいつもの通りです。(A) (1) /-ŋks, ŋkt, ŋθs/, /-lbz, lbd, lmz, lmd, lnz, lnd, lvz, lvd, ldz, lft, lfθ, lkt, lks, lpt, lps, lts, ltj, lst/, /-mps, mpt, mfs, mft/, /-ndz, ndθ, nst, nts, ntj, nθs/, /-dθs/, /-fts, fθs/, /-pts, pst/, /-kts, kst/, /-sps, spt, sks, skt, sts/, /-tst, fθs/ (2) (a) (ii) (β) /-ldz/, /-ndz/ (b) (i) (β) /-nzd, nft/, /-dzd/, /-tft/ (B) (1) (a) /-ŋkθ/, /-nθt/, /-ksθ/ (b) /-d3d/ (2) (a) /-ŋst/, /-dst/ (57例)

7. 四重尾韻群子音の機能 三重尾韻群子音において既存のものに F<sup>3</sup>a または F<sup>3</sup>b が付着したものばかりで、(a+b+c)+d で全部が処理できます。しかも bcd もまた三重連結に既存であります。従って、新しい組み合わせは皆無で、その機能は6に準じます。すなわち、(1)/abc/-/d/:/-ŋkθs, ŋkst/, /-lkts, ltst, lfθs, lkst/, /-ndθs/, /-mpst, mpts/, /-ksts, ksθs/ (2)/abc/-/d/:/-ld3d,

ltft/, /-ndʒd, ntft/ の2種以外にありません。(abcの内的機能は6を参照のこと。)

8. 頭韻群子音との比較 頭韻群子音と尾韻群子音は核音を中心にして系数は互に逆の方向に延ばされていますので、両者は鏡に映ずる像の如く相対するわけであります。従って一方の方向を逆にして重ねてみますと、ピッタリと一致するものがかなりあります。このことは興味のある事実で、英語の音節の構造が核音を中心として周辺部の子音を相似的に引きつけていることを示し、全くデタラメなものでないことを物語るものといえましょう。頭韻群子音の数が尾韻群子音よりもずっと少ないのは、前者が /+/ (これは接続を示すものですが、これについてはいずれ触れるつもりです) の後であり、後者が /+/ の前であることに關するところがあると思われます。それにしても、両者が必ずしも全部一致しないのは、そうした条件の差異がある以上やむをえないことではありますが、またいわゆる半母音が核音の前と後では連結の条件が異なることにも注意しなければなりません(複核を記述した部分の拙稿参照)。前者の数が少ないので、これを逆に並べて後者と一致するものを拾ってみますと、両者とも \* を一切省いた場合、 /lf, lp, lb, lk, ls, lf, fs, ps, ks, ns, ts, ft/ がみられます。

次に前者をそのままにして後者と一致するものを探してみますと、 /tʃ, dʒ, sp, sk, st/ があります。この5つのみが頭・尾韻に共通する群子音であることを考えますと、ここにも何か意味があるように思われます。すなわち、これらのみが方向を変えずに両韻に現われるという事実によって、単なる子音の連結でなくてそれぞれに1つの単位をなすものとみる解釈ができないかということです。そうすると、その中でも /tʃ/と/dʒ/ はその濃度が高いようですし、特に /dʒ/ にいたっては頭・尾韻ともに選択による連結でありますから、複合群子音にとどまらず単子音とみることもすらすらできるかもしれません。ところが、定義上頭韻と尾韻とは別個の範疇であることは、たとえば /h-/と/-ŋ/ が互いに相補的分布 (Complementary Distribution) を示すにかかわらず同一の音素とされないことによっても明らかですから、共通するということが直ちに上のような結論を導くことにはなりません。ただし、C←I↔F/ という系合の機能を考えるならば、これらの5組のものは頭尾韻の対立が融合 (Syncretism) を生じている点において、たとえば /-p/ + /-p/ = /-p-/ と同じであるということとはできましょう。従って /-tʃ-/、/-dʒ-/、/-sp-/、/-sk-/、/-st-/ と表記する

ことは許されてよいと思います。しかしながら、a と b があってさらに ab が存在するという事実によって、単子音であることは当然に否定されねばなりません。それならば複合群子音とすることができるといえば、これも一概にはいえぬのでありまして、この問題は頭韻である場合と尾韻である場合とで決定されなければならないことです。このうち、/sp, sk, st/ は両韻で非複合、/dʒ/ は両韻で複合、/tʃ/ は頭韻では複合、尾韻では非複合であります。純粹な形式的操作を行った結果は、前述したように /tʃ/ と /dʒ/ とを 1 対のものとする、実質を用いた従来の慣行と異なったものになっていますが、このことは尊重されるべきでしょう。最後にせめて /dʒ/ だけでも単子音とすることができないかということですが、これも既に検討したところです。しかしそのときも申したことですが、群子音は頭韻と尾韻で調査することで終るのではなくて、まだ語中母音間にみられるものを考究しなければその全貌をつかむことはできません。またそれに関連して、連接 (Juncture) ということも無視できぬ事項であります。そこで、次にそれらについて述べることになるのですが、最初本稿で完結がつけられる予定であったところ、気がついてみると、これまでも割りあてられた紙数を既になんかなり超過していますので、誠に残念ですが未述の分は別の機会をつかみ終篇として補ないたいと思います。

(尾韻群子音の部おわり)